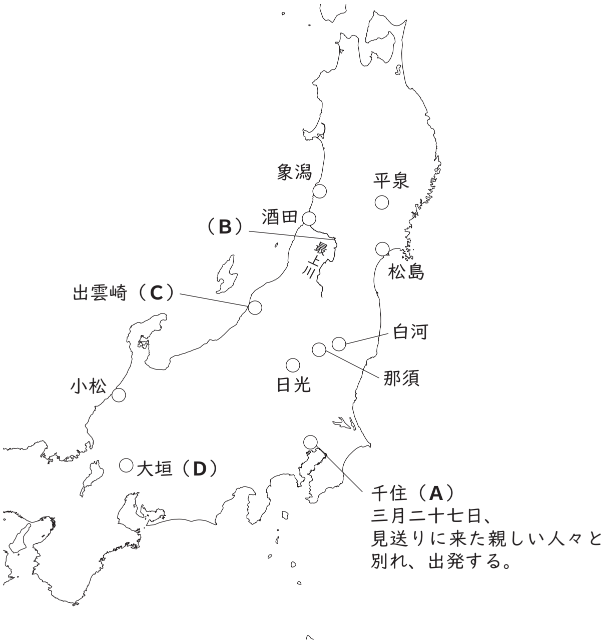
『おくのほそ道』の基礎知識

『おくのほそ道』は**江戸時代**前期の**松尾芭蕉**による紀行文。芭蕉（本名・宗房）は伊賀国出身の俳人で、俳諧の芸術性を高め、蕉風俳諧を創始した。

『おくのほそ道』には、芭蕉が四十六歳の元禄二（一六八九）年、門人・河合曾良とともに江戸を出発し、奥羽・北陸を経て美濃国大垣に至った旅について記されている。



A
行く春や鳥啼き魚の目は泪
過ぎ行く春よ。名残を惜しむかのように鳥は鳴き、魚も目に涙を浮かべているように感じられる。

B
五月雨をあつめて早し最上川
折からの梅雨の雨を集めて水がみなぎり、いちだんと流れが速い。この最上川よ。

C
荒海や佐渡によこたふ天河
日本海の荒海よ。海のかなたにある佐渡島にかけて天の川が横たわっている。

D
蛤のふたみに別れ行く秋ぞ
蛤が蓋と身にわかれるように、集ってくれた親しい人々と別れ、私は伊勢の二見が浦に行く、過ぎ行く秋よ。

俳諧

複数の人が長句（五七五）と短句（七七）を交互に詠み継いでいく文芸を**連歌**という。連歌は室町時代に流行し、連歌の中でも滑稽さを求めたものは、俳諧の連歌、略して**俳諧**とよばれた。また、連歌の最初の一句を**発句**という。発句には最初の句としてその時々の季節を表す語が求められた。

江戸時代になると、松尾芭蕉のほか、与謝蕪村、小林一茶といった俳人が現れ、発句は独立して鑑賞されるようになった。その後、明治時代の正岡子規らによって、近代俳句が確立した。

確認テスト

(1) 次の文の（　）に当てはまる言葉をそれぞれ選びなさい。

『おくのほそ道』は（①）の前期に（②）によって書かれた紀行文である。

ア 室町時代　**イ** 安土桃山時代　**ウ** 江戸時代
エ 小林一茶　**オ** 松尾芭蕉　**カ** 与謝蕪村

①［　　］　②［　　］

(2) **A**～**D**の句の季語が表している季節をそれぞれ答えなさい。

A［　　］　**B**［　　］　**C**［　　］　**D**［　　］

(3) **A**と**C**の句は、含(ふく)まれる切れ字と、句切れが共通している。共通して含まれる切れ字を書きぬき、句切れの種類を記号で答えなさい。

切れ字［　　］　句切れ［　　］

ア 初句切れ　**イ** 二句切れ　**ウ** 句切れなし

(4) 次の**ア**～**エ**の句を、おくのほそ道の行程の順となるように並べ替(か)えなさい。

ア あらたふ(トウ)と青葉若葉の日の光（日光(にっこう)）
ああ尊いことだ。この日光山の青葉若葉に降り注ぐ初夏の日の光は。

イ 石山の石より白し秋の風（小松(こまつ)）
この那谷寺の石山の石よりも白く感じられる。この吹き過ぎる秋の風は。

ウ 象潟(きさかた)や雨に西施(せいし)がねぶの花（象潟）
象潟よ。雨にけぶる風景を眺めると、古代中国の美女・西施が物思わしげに目を閉じる姿を思わせて、ねむの花が雨にぬれている。

エ 田一枚植ゑ(エ)て立ち去る柳(やなぎ)かな（那須(なす)（蘆野(あしの)））
あの西行が立ちどまったという柳の木かげで感慨にふけっていると、いつの間にか田一枚の田植えが終わって人々は去り、私も柳から立ち去ることだ。

［　　→　　→　　→　　］